

## スターバックス・コーヒーにて

登場人物

店員

客たち

JRの福島駅内スターバックス・コーヒー。

店員。客二人、年老いた夫婦。

一人の男、スマホを熱心に見ている。

その他数人の客たち。

女子高生の客6人が来る。

注文して、座る。

女子高生6人。4人(3、4、5、6)は、駅構内が見下ろせる場所に並んですわり、上級生の二人(1、2)はテーブルを隔て対面して座る。

1「おいしい」

2「にが。にがーい」

3「え、いくいく」

2「にがーい」

4「むりむり」

1「おいしい」

2「わ、にがーい」

5「おいしい」

1「え、おいしくない？」

2「やだ、やだ」

6「お母さん、夏風邪」

2「ね、にがいよね」

3「え、うそ」

4「スプーン」

5「くるくる」

1「おいしい」

4「あまい」

5「あした？」

4「いくいく」

1「大会でしょ」

2「補習」

1「まじ」

6「めっちゃ」

2「にがーい」

5「これって」

夫婦

妻「コーヒーもういいか」

妻、ゴミを捨てに行く

妻「あんた、トイレさ、いかないでいいかな」

妻「トイレ、向こう、あったよ」

妻「いくの。行ったら」

妻「それじゃ、見て来てやっから」

妻、トイレを見に行く。

女子校生たち。

5「ああ」

6「いたいた」

3「なんか」

4「え、みない」

1「くれば、でも、いけるって」

2「こんどね」

6「ちんしたの」

1「おいしい」

3「おしまい」

6「でも、ないよ」

2「休み明け」

5「うごくって」

1「え、まだまだ」

5「週明け」

妻、戻って来る。

妻「行ってきたら。奥にあっから。行って来たら」

夫、ゆっくり、立ち上がる。

妻「女ははいつてっけど、男はあいてた」

妻「まっすぐ行って、曲がって、右にまがって、左」

女子高生。

5「なんかね」

1「青学」

6「うん」

1「お母さんと」

2「へー」

1「説明あって。模擬授業みたいな」

2「泊まる？」

1「泊まる」

2「ディズニーランド」

1「でも、やすいよ」

3「いいよー」

4「いいって」

5「まじまじまじ」

2「にがーい」

5「家の」

6「今回は」

5「ネコ」

2「指定校」

1「センター試験も受けなきゃ」

2「指定校やったら」  
1「青学」  
2「レベルでしょ。ここ」  
3「はやいところ」  
6「うそ、コウガミでしょ、古典の」  
4「鬼。もってる」  
2「あいうえお順」  
4「でもさ、つきあってる」  
5「ええ。言わないで」  
6「だから、かくしてないって」  
1「ううん」  
2「なくなるよ」  
4「楽譜もってくの」  
3「いいよ」  
5「ごはん行くの」  
6「食べる」  
5「ごはん、いいかな。いかないわ」  
1「おかしいな」  
4「ランチ」  
5「いくほうがよくない」  
1「とおいよー」

男が一人、来る。注文して、飲み物を受け取り、スマホの男のところに来る。

天使「ここ、いいですか」

男「はい」

天使「今、え、どうして、他にも、席空いてるのになって思いましたね」

男「ええ。どうして、わかったんですか」

天使「私は、心の声を聞くことができます」

男「へー」

天使「ま、言わば、天使です。福島という街に舞い降りた」

男「ああ。そうか。だから……なんか、あなたの身体、向こうが透けて見えます」

天使「ええ。今、私に、あなたはしゃべっていますけど、これは、あなたの心の声なんです。……私の姿も声も他の人には見えてませんから」

男「……私の心の中が声になって今まきに出ていて、同時に私は心の中のぼんやりとした考えが、あなたの導きで整理されていくわけか。いいですね」

天使「ええ。存分に整理してください、刻一刻と変化する、そのお考えを。混沌とした、あなたの思考を」

男「ありがとうございます」

二人、見つめ合う。

客、おばさん3人（1、2、3）

1「もどればいいじゃない」

2「はらわれないわよ」

3「それはないって」

1「ひどい」

2「みたでしょ」

3「選挙だって」

1「ひどい」

2「あらってたの車を」

3「いやー」

2「息、してなかったから、かえって、軀もいいもんだっておもえたわよ」

1「どうしたの」

3「警察よんだのよ」

2「それじゃ、食べてけないわ」

3「苦勞をね、して」

1「中国の人だったって」

2「やさしいから」

3「だまってたって」

1「えー」

3「息子の弁当よ」

1「えー」

2「ひどい」

3「まってまって、じゃ、パーマはどうしたの」

1「すごいの、もう」

2「ああ」

3「あそぶことばかりで」

1「あの人」

客、サラリーマン3人(1、2、3)

1「だったらさ、やりたいたけだろ」

2「仕方ないからさ」

3「明日から、昨日までのことは」

1「くる日もくる日も」

2「ああ。煙草吸うか」

3「引田さんのおかげですね」

1「明後日はおまえ」

2「ここまでかな」

3「娘、迎え行くのいつだったかな」

1「笑ったよ」

2「約束した」

3「キャバ嬢でしょ、それ」

2「信じたの、それ」

3「うまいことやってさ」

1「うまいこといったよ」

3「うまい店しってるか」

1「やだやだ」

2「ただ、同然」

3「お城、見に行くかな」

1「だから」

2「おまえ、聞いてた、鈴木の話」

3「だったら、染めるっきゃないって」

2「よそうよ」

天使に、男は、昨日のエピソードを語る。

男「私は、昨日のお昼、福島に来たんです。取材して戯曲を書くためです。福島という街を題材にしたお芝居を、東京で上演しようと思ってます。……一日中、歩き回りました。でも、なかなか、街のことはわからなかった。で、夜になって、なんでもいから、行き先もわからないままで電車に乗ってみようと思ひ、行き先のわからない二両編成の電車に、乗りました。」

天使「あそこに見えるのは、昨日のあなたですか」

男「ええ。……ああ、そうですね、確かに、昨日の私です」

電車に乗っている男がいる。

男「何人かの乗客がいて。もちろん、地元の人たちで、それも、だんだん減っていきます。窓の外は真っ暗で、自分の顔しか映りません……、もうこれ以上、福島を中心から離れるのは、どうかな、不安だなんて思って、……降りました」

昨日の男は、降りる。

男「無人駅でした。反対側の、福島行きのホームで時刻表を見ると一時間以上は来ません。歩くことにしました。そのとき、私は、方向を見失ったんです。闇の中の、なにもない、道で、前後不覚になりました。……曇り空で、その雲に光がありました。それは、きっと、街の明かりが反射しているのだと思い、そこをめがけて歩きました」

昨日の男は、歩く。

男「途中、畑か、田んぼのような場所で、光の点滅を見ました。……農作物を外敵から守るための仕掛けだったのか、規則的な点滅でした。でも、……なにかのサインのようで、私はしばらく見ていました。……あれは、なんだったのでしょうか。見とれてしまって」

男「そしたら、また、見失ったんです。手がかりにしていた、空に映った街の明かりは消えていて、……ただ、ひたすら……私は、その点滅の光につつまれるばかりで、……つまり、そこが、その光のチカチカがこの世界の中心っていうか……ここが、行き着く先で、このサインは、そういうことだったのだと思いました」

天使「じゃ、あなたは」

男「ええ。あれから、私、動けませんでしたし、あれ以上は動こうとは思わなかった」

天使「あなたは、まだ、あそこにいるってことですか」

男「……ええ」

昨日の男は、途方に暮れている。

夫、戻って来る。

妻「いい。いい、これは私、持ってくから」

妻「いい。もう、払ってあっから」

老いた夫婦は去る。

カフェの喧噪。

昨日の男だけが動かない。